

茶の寄合の形成

竹  
川  
陽  
子

## 要旨

本論文では、茶の湯が大成される以前、室町前期頃までの茶の日本における受容、特に集団による受容と、茶を用いて成り立つた一座について考察した。まず茶の受容と普及の展開を概観し、次に同時代に書かれた茶に関する書中に、喫茶する集団への視点はあるか、あるとすればどうとらえていたのかを精査する。そして、茶を集団の中で用いる上でどのように捉えていたのか、「共飲共食」という思想からも考察した。

中国からもたらされ、主に僧たちによって薬として、あるいは儀式に用いられていた茶は、鎌倉末期、南北朝、室町期にはいると、宴や遊興の席などで集団において用いられ始め、人々が寄合を持つための格好の理由となり、「闘茶」という遊びが盛行した。闘茶とは、座に集った人々が順に茶を回し飲み、その産地を当てるといふ遊びで、初めは二種の異同を当てて「本非十種茶」という単純なものだったが、産地の広がりや品質の向上などを理由に、茶三種を用いる「四種十服」など内容が複雑化してゆく。武家や公卿、庶民にまでにも、喫茶文化は広く普及し、侘び茶形成の土台となった。

茶に関する論書中では茶と集団との関係をどのように捉えているだろうか。

栄西著『喫茶養生記』においては、効用や用い方などが取りあげられているだけであり、集団が茶を服することの意義やその作法といったことには触れていない。玄恵法師著『喫茶往来』では闘茶を含む茶会の様子が描写されている。中国の文化（茶の醸し出す神仙への憧れ・絢爛豪華な中華文化）に思いをはせて楽しむ様子が見られ、また座衆には能動的に会に関わり、座を一座と成りとする意思が見られる。

さらに茶は、葉や単なる遊興の手段としてのみ用いられたのではない。僧侶たちは、茶を神仏へ献じる物として、施茶として、また修行の助けとして扱っており、茶は人と神仏との間を媒するものであった。同じ火で煮たきした食物を、神や祖霊と共食することによって、神と人との間に目に見えぬつながりを生じ、人と人とが一つ釜の飯を食うことによって、お互いの身が離れがたい縁で結ばれる、という信仰が各地に存在しており、これも茶会の背景として考えられる。階級を超えて広がった喫茶の文化は様々な面を持ち合わせ、集団で用いられる際にも成員によってそれぞれ求めるものに異なる点があったが、茶の会は、古くからある信仰や、神秘性に支えられた場であり、参加者はその中で次第に心がより合わさって一座となつてゆくことを求めた。